

野外活動実践の足跡と課題

Outdoor Activity and It's Problems

中 俊 博 (教育学部)・家 崎 満 大 (教育学部)
原 通 範 (教育学部)・加 藤 弘 (教育学部)
矢 野 勝 (教育学部)・亀 井 恭 子 (教育学部)
松 岡 勇 二 (教育学部)

はじめに

野外活動に関心が生じた要因としては、昭和30年5月の、文部省事務次官通達¹⁾で「青少年野外活動の奨励について」の公文書が出され、形式的に整理されたスポーツに加えて自然を背景としたレクリエーション活動が位置づけられたことである。

その後、昭和36年6月に制定されたスポーツ振興法²⁾で、野外活動の概念が明確化され、しかも、「国および地方公共団体は、心身の健全発達のために行われる徒歩旅行、自転車旅行、キャンプ活動、その他の野外活動を普及振興するため、コース設定、キャンプ場の開設その他必要な措置を講ずるよう努めなければならない。」と規定されたことも重なり、野外活動は、より一層普及、振興するに至った。

この背景としては、当時のマスコミ用語や流行語³⁾をみれば、昭和33年は、「団地族」、同35年は、「インスタント時代」、同36年は、「レジャーブーム、スキー客100万人突破・登山者224万人」、同37年は、「東京にスモッグ続々発生」などがあり、こうしたことから野外活動への志向の動機が汲み取れる。

本教室では、こうした野外活動の隆盛に先立って、冬期の代表的な野外活動であるスキー実習を、昭和28年1月に開始し、その後、毎年、新潟県の妙高高原のスキー場にて、実践している。

そこで、昭和44年、キャンプを中心とした、夏期の野外活動の実践を開始した。

1. 野外活動の基本的視点

野外活動の内容として^{1) 2)}一般的には、「自然環境の中で自然に親しみ、自然を理解、愛好しながら、実践される、キャンプ、営火、野外炊飯、ハイキング、ピクニック、ワンダーフォーゲル、ホステリング、登山、釣り、スキ、スケート、水泳、海水浴、自然研究、観察旅行、写生など」が、活動内容として、考えられているが、教職現場での指導と夏期ということの関連で、テント設営によるキャンプ、野外炊飯、オリエンテーリング、ウォークラリー、サイクリング、キャンプファイヤー、キャンプでのレクリエーションゲーム、フォークダンスを活動内容とした。

さらに、これらの活動を実践するについては、自然の中での活動であることと、社会性の二側面を基本的視点とし、次の4目標を掲げた。

1) 五感による直接体験の重視と、それらの体験の積み重ね

- 2) 体育的活動に偏重せずに、できるかぎり自然を総合的に学習する
- 3) 野外活動に関する知識、技術を体得する
- 4) 共同生活による、役割、責任感、自発的協力心による自己の社会性の拡大を図る

2. 実践の足跡

第1回（昭和44年）から第20回（平成3年）の活動の実践を、日程、場所、活動内容、参加人員別にまとめ表1にまとめた。

この表1を参照しながら、過去の実践活動を振り返り、特に、各回で印象に残った事象を述べ、あわせて各回の活動の特性を記す。

第1回、第3回、第4回は、潮岬の青年の家をベースキャンプ場としたテント生活である。

蚊に悩まされ、睡眠不足の上に、三度の飯盒炊飯に時間を費やし、時間に追いかけられたエネルギーな活動であった。

特に、第1回と第4回は、古座川の上流の「一枚岩」ポイントまでをサイクリングで健脚をみせ、「一枚岩」の川原にテントをはり一泊した。

第2回の青年の森キャンプ場は、和歌山県青少年局が、和歌山市山口地区の紀泉高原、雲山峰に新装開設した施設で、建物（倉庫、便所）は、完成していたが、適当な日陰の場はなく、暑さ凌ぎに苦心した。

また、交通の便がとても悪く、自動車は途中までで、あとは歩行にて、約15分程度、キャンプ場までの山登りである。

買い物は、不便が予想されたので、食料を買いこんでのキャンプは、暑中でもあり、食料の保管に気がつかった。

第5回、第6回は、専攻学生達の自発的な活動で、仲間との親睦に視点を置き、海辺での、海水浴、ボンファイヤー、ソングを楽しみ、時間的制約のない活動であった。

第7回は、サイクリングを中心にした、移動キャンプで、淡路島を3泊4日のテント生活と飯盒炊飯しながら、約100km走行し、淡路島一周の健脚を示した。

第8回は、新装開設された、白崎少年自然の家を利用したが、自然の家の内部の環境は整備され、活動しやすいが、海岸へでるコースは、不便であったので、環境整備し、近道を切り開いた。

第9回の特筆は、サイクリングで、玉川沿いに宿地区から、高野山の奥の院までのマウンテンコースに挑戦したことである。（走行距離約70km）

午前9時30分に青年の家を出発し、奥の院到着時、先頭と最後尾とは、約1時間差あり、計画時間の午後4時40分の夕べの集いの時間に間に合わないことを連絡し、下り坂を安全走行に配慮し、帰路についた。

第10回は、新種目の体験として、アーチェリーを実践すべく、施設近接の根来山境内にて活動し、さらに、緑化センターにて、現地指導員の協力をえて、植物観察、栽培について学習した。

第11回は、キャンプファイヤーを重視した活動で、第1日目にキャンプファイヤーの講義、次の第2日目にキャンプファイヤーの実践を行った。

第12回は、潮岬の青年の家が、改装されたこともあり、9年ぶりに紀北から紀南に場所を移動した年である。

この時、台風が潮岬に接近し、青年の家の職員が、「宿舎で泊まりませんか」との好意を断り、

台風の風の中、テントにて一夜を過ごした。

幸い、テントは、10人用の大きいテントであったことが、強風を凌げた要因であった。

職員からは、「貴重な体験をした」との賛辞をうけた。

第13回以降は、活動内容の検討を考えるべく、まず、疲労度の減少と、時間の有効利用から、宿舎にて睡眠をとり、野外炊事を食堂利用に切替え、各活動に時間をかけた実践活動へと変更した。

各回の特色を記すと、第13回は、サイクリングの復路に、オリエンテーリングを行った（サイクリング・オリエンテーリング）が、コースが下り坂の競争となり、自転車1台破損した、危険なレース展開になった。

第16, 17, 18, 19, 20回は、第2日目の夕食のみ食堂利用をやめて、野外炊事を行い、各グループで、飯盒炊飯と、献立による夕食づくりを実践した。

また、キャンプファイヤーについては、野外で実践してきた（第13, 14, 15回）が、第16回以降は、キャンプファイヤーの進行プログラムを充分理解しながら行えることを考えて、室内にて説明しながら行える、室内でのキャンプファイヤーを行ってきた。

<注>第9回までは、教官の旅費は支給されず、自弁であったが、第10回以降旅費は支給されているが、第14回以降は、海浜実習（遠泳）と交互使用している。

表1 体育演習野外活動年次別実践表

日 程	場 所	主 な 活 動 内 容	参加人員
1 昭和44年7月 16日－20日	潮岬青年の家 (串本町)	テント生活、飯盒炊飯、サイクリング、磯遊び、水泳、キャンプファイヤー、レク・ゲーム、F. ダンス。	18
2 昭和45年7月 15日－19日	青年の森キャン プ場(和歌山市)	テント生活、飯盒炊飯、ハイキング、山歩行オリエンテーリング、川遊び、レク・ゲーム、F. ダンス。	12
3 昭和46年7月 12日－15日	潮岬青年の家 (串本町)	テント生活、飯盒炊飯、サイクリング、フィッシング、キャンプファイヤー、レク・ゲーム、F. ダンス。	17
4 昭和47年7月 12日－15日	潮岬青年の家 (串本町)	テント生活、飯盒炊飯、サイクリング、オリエンテーリング、レク・ゲーム、F. ダンス、キャンプファイヤー。	20
5 昭和48年7月 12日－15日	白浜海岸 (白浜町)	テント生活、飯盒炊飯、海浜遊び、水泳、キャンプファイヤー、ソング。	13
6 昭和49年7月 12日－14日	磯ノ浦青年の家 (和歌山市)	テント生活、飯盒炊飯、海浜遊び、水泳、レク・ゲーム、ソング、キャンプファイヤー。	12
7 昭和50年6月 30日－7月3日	淡路島一周	サイクリングによる淡路島一周移動キャンプ(テント生活、飯盒炊飯)	13
8 昭和51年6月 30日－7月3日	白崎少年自然の 家(由良町)	テント生活、野外炊事、オリエンテーリング、ハンドクラフト、キャンプファイヤー、レク・ゲーム。	14
9 昭和52年11月 17日－19日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	宿舎生活、食堂利用、サイクリング(高野山)、キャンプファイヤー、テニス、全体討議・反省会。	24
10 昭和54年6月 28日－30日	根来寺境内一乗 閣(岩出町)	宿舎生活、自炊、アーチェリー、キャンプファイヤー、レク・ゲーム、オリエンテーリング、植物観察。	33
11 昭和55年6月 26日－28日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	テント生活、野外炊事、サイクリング、オリエンテーリング、キャンプファイヤー、レク・ゲーム。	29
12 昭和56年6月 25日－27日	潮岬青年の家 (串本町)	テント生活、野外炊事、サイクリング、フォークダンス、レク・ゲーム、キャンプファイヤー、全体討議。	41
13 昭和57年10月 1日－3日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	宿舎生活、食堂利用、オリエンテーリング兼サイクリング、キャンプファイヤー、レク・ゲーム、テニス。	23
14 昭和58年10月 3日－5日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	宿舎生活、食堂利用、オリエンテーリング、サイクリング、キャンプファイヤー、レク・ゲーム、テニス。	10

日 程	場 所	主 な 活 動 内 容	参加人員
15 昭和59年10月 2日－4日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	宿舎生活, 食堂利用, ウォークラリー, サイクリング, レク・ゲーム, キャンプファイヤー, F.ダンス。	23
16 昭和61年10月 3日－5日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	宿舎生活, 食堂利用, 野外炊事, ウォークラリー, サイクリング, レク・ゲーム, F.ダンス。室内のキャンプファイヤー, テント設営, 外部講師の講義等。	30
17 昭和63年10月 4日－6日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	宿舎生活, 食堂利用, 野外炊事, ウォークラリー, サイクリング, レク・ゲーム, F.ダンス。室内のキャンプファイヤー, 外部講師の講義等, 全体討議。	25
18 平成元年10月 3日－5日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	宿舎生活, 食堂利用, 野外炊事, ウォークラリー, サイクリング, レク・ゲーム, F.ダンス。室内のキャンプファイヤー, 全体討議。	11
19 平成2年10月 3日－5日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	宿舎生活, 食堂利用, 野外炊事, ウォークラリー, サイクリング, レク・ゲーム, F.ダンス。室内のキャンプファイヤー, 全体討議。	23
20 平成3年9月 24日－26日	紀北青年の家 (かつらぎ町)	宿舎生活, 食堂利用, 野外炊事, ウォークラリー, サイクリング, レク・ゲーム, F.ダンス。室内のキャンプファイヤー, 全体討議。	39

3. 実践からみた野外活動のすすめ方

今回この20回の実践から野外活動の学習指導のすすめ方を検討する資料として, 次の4型に分けて考えてみた。

表2 野外活動の学習指導の型 (実践からみた)

学習の型	特 性
総 合 型	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつかの異なる活動内容を1回の実習期間に総合的に学習する。 ・時間的制約の中で, 順次, 活動内容が変化するから, 心理的に興味や関心の変容し, 新鮮な気持ちで活動に望める。 ・活動が遅れると, 休憩時間が少なくなり, 体力的な疲労度が高い。 ・広く, 浅く体験となりやすいから, 初心者向きといえる。 ・個人の体験差が, 学習の充実差となりやすい。
単 独 型	<ul style="list-style-type: none"> ・単一の活動内容を1回の実習期間に学習する。 ・活動に充分時間があり, 充実した活動になる。 ・興味のない者にとっては, 退屈である。 ・集中的学習に向いている。
依存集中型	<ul style="list-style-type: none"> ・総合型と単独型との中間型で, 活動のうち依存できる内容は, 施設提供者等に依存し, 中心となる活動に視点をあて学習する。 ・活動内容の選択が重要である。
親睦重視型	<ul style="list-style-type: none"> ・目標が明確でないが, 社会的, 心理的感情が充足される。 ・集団のリーダーシップとフォロアーシップがいい場合, 内容は充実する。 ・自然との触れ合いよりも, 仲間との触れ合いに陥りやすい。

実践の初期の頃は, 野外活動といえば, キャンプ生活であり, 不自由は当然であり, 食事は飯盒炊飯, 蚊や蛇の不快感を味わい, 草の上に毛布を敷いて寝るのも当然だと考えて実践した。

基礎的な体験もあり, その上, 活動全体を見通し, 先取りする能力をもっていたことで, 問題も少なく行ってきたが, 第13回頃から, 野外活動の基礎的体験不足が目立ち, 依存集中型になった。

最近の野外活動の考え方の中には、自然での活動をしなくとも、弁当を購入し、自然の中で、食事をするのも野外活動だという考えも聞かれ、親睦重視型も再検討せねばならないが、指導者を目指した野外活動では、目標達成のためにも、自発性と指導性から検討した活動法を、形成的評価を加えながら実践せねばならない。

広く、浅い体験学習が、予想されるが、「依存集中型」で、学習環境の整備された場所にて、施設提供者にて、依存できうるものは依存し、重要学習課題に視点をおいた活動内容をすすめたい。

4. 今後の課題

ここでは、野外活動の実践の評価と受講生のアンケートの回答をもとに、まとめたことを述べ、今後の課題とする。

1. 時期については、初期（第1回～第8回）は、夏期休暇直後の7月12日以降に行ったが、暑さのため、活動度の低下、疲労度に問題があり、夏期休暇前の6月末に行ったが、梅雨の時期と重なり、活動に変更が生じやすい。

前期試験休暇を利用した、10月第1週は、季節的に最高であるが、指導者になった場合を考慮すると、暑さの体験、雨の体験も必要であろう。

学年暦からみれば、9月の下旬となろう、また、この時期は、野外活動にはいい季節でもある。

2. 会場については、経費の安価と豊富な活動が実践し易く整備（保健、安全面を含む）されている、県立の青年の家を利用しているが、このことについてのアンケートをまとめ、表3に示した。

これらの結果から、短期間で効率の良い体験学習をするには、青年の家は、施設、用具が整備され、その上、指導者も存在することで、最適な環境といえよう。

しかし、保護された環境であることは、否めなく実体験の不足を補う活動の重要性を改めて考えねばならない。

表3 施設(青年の家)利用に対する感想、意見(昭和63年,平成元年,2年,3年)

回答数	ア ン ケ ー ト の 内 容
23	・自然の中に設置されていて、日常生活から離れ、気分転換できる。
16	・キャンプファイヤー、サイクリング、ウォークラリー、野外炊事などの準備、整備がされている上、職員の指導者も存在し、学習がしやすい。
12	・野外での実体験（テント生活、野外炊事、キャンプファイヤー）の乏しさによる、指導への不安と実体験への希望。
9	・指導者との接触による、学習への興味や意欲の向上。
7	・場所の固定からローテーション（山、海、森）への希望。
7	・規律ある生活ができたこと。

3. 野外活動全体を通してまとめると、役割分担をしていることで、他人への依存心があり、積極的な学習をしなかったことである。

これは、各活動の体験がとても少ないこともあり、どの場面で、どの程度のフォローをすればいいのかの判断基準が明確でないこととも一致する。

ああすればよかった、もっと積極的な行動をとりたかったといった、反省を殆どの者がしている。しかし、初心者から、2回、3回と連続して参加している者をみれば、かなりの野外活動の技術を獲得しているようにみていることでもあり、当然ではあるが、体験の重要性を指摘した

い。

また、これらの依存的傾向は、最近、目立ってきている。

野外活動は、自然を対象にした活動だけに、競争よりも協力、勝利志向よりも克服志向の要素が強い活動だけに、集団づくりや意欲の育成に欠かせない活動である。

社会が、工業社会（所有＜to have＞）から、脱工業化社会（存在＜to be＞）へと変貌し、レクリエーション的野外活動から、自己実現、自己開発的野外活動の時代となっている。

江原（京都大学霊長類研究所）は、「人類の歴史は、99.9%までは、狩猟・採取の生活であり、現代の生活は、まさに、水中の魚が、陸上に出てきたようなものである」と述べているように、人間性回復、自己実現の基本的な活動は、野外活動といえる。

この20回の実践活動を振り返ってみると、野外活動の知識、技術の獲得を中心とした活動であった傾向が強く自然を凝視する時間を忘れていた。

ウォークラリーは、競争的であり、「よく見れば なずな花咲く 垣根かな（芭蕉）」の句を表現できるほど自然を充分観察する機会もなく、傍観者的な自然観察であった。

テレビでのマジックのシーンに、歓喜の声をもらすのに、自然の変化に気づかず、紅葉や落ち葉に対して拍手をおくらないことは、自然からの隔たりを感じる。

体験を重視する野外活動ではあるが、自己実現、自己開発と自然を凝視する視点から、再検討することを課題としたい。

〔参考文献〕

- 1) 野外活動マニュアル：日本野外活動団体協議会編，杏林書院，1988.5.
- 2) 野外活動テキスト：日本野外活動教育研究会編，杏林書院，1988.8.
- 3) 現代用語の基礎知識：自由国民社，1979.
- 4) 松田義幸：学習社会に向けてのレジャー の意義—語源と社会心理調査を手がかりにして—，筑波大学体育科学紀要，第11巻，昭和63.3.
- 5) B級スポーツ指導員教本，（財）日本体育協会編，平成3.10.
- 6) 長谷川純三監修，芳賀健治訳：新しい野外活動，不昧堂，昭和60.4.